



朝護孫子寺の本堂前からの景色。森に囲まれた寺域の最上部に多宝塔が見える。

信貴山・朝護孫子寺

日本最初の毘沙門天の霊地

酒本 幸祐

毘沙門天は、私にとって縁の深い仏様であり、その毘沙門天が、日本で最初に示現した奈良県の信貴山・朝護孫子寺を訪ねた。記憶はほとんどないが、50余年を経て2度目である。

毘沙門天はインドの古い神であり、財宝福德の神とされていた。中国に伝わると武神としての信仰が生まれ、武神・守護神とされるようになった。

毘沙門天との表記は、サンスクリット語の発音を中国語で音写したもので、「よく聞く所の者」という意味であるという。このことから多聞天とも訳されている。

仏の住む世界である須弥山の四方を護る四天王の一尊で北方を守護する。日本では四天王の時は多聞天と呼ばれ、独尊としては毘沙門天と呼ばれることが多い。

日本における毘沙門天信仰の発祥は、平安時代の鞍馬寺であるが、中世になると毘沙門天は福の神として、恵比寿、大黒天にならんで人気を得るようになった。

姿は甲冑を身に着け、宝棒、宝塔を持ち、様々な様式のものがある。真言はオンベイスラマンダヤソワカ。

さて信貴山であるが、その歴史は古い。はるか聖徳太子の時代である。

聖徳太子は敏達天皇3年(574年)欽明天皇を父



朝護孫子寺の本堂。斜面地に建てられていて堂前からの眺望は素晴らしい。(信貴山案内チラシより)



本堂に祀られている前立毘沙門天王像。右に妃の吉祥天、左に息子の善膩師童子を脇侍として祀られている。(朝護孫子寺印刷物より)

にもつ異母兄妹の間に生まれた。父は橘豊日皇子であり、厩戸の前で出生したことで、厩戸と命名された。または母の実家の蘇我馬子の屋敷で生まれたことで、厩戸と命名したなどの説がある。なお聖徳太子の名は没後の諡号であるが、ここでは聖徳太子と書くことにする。

聖徳太子は幼少期から聡明で、仏法を尊じだといわれている。また様々な逸話がある。有名な話では、ある時、太子が人々の請願を聞くことがあり、10人にも及ぶ請願者が我先に一齐に話した。太子は全ての人の発した言葉を漏らさず一度で理解し、的確に返答したというのはよく知られている。

用明天皇元年(585年)敏達天皇が崩御し、太子の父が即位して用明天皇となった。この頃、以前から対立していた河内国(大阪)を拠点とする物部守屋と、大和国(奈良)を拠点とする蘇我馬子の二大豪族が、仏教の受容を巡って激しく対立するようになった。

用明天皇は仏教の受容を願っていたが、頑なに排仏を主張する守屋と、崇仏派の馬子の対立は避けられないものとなった。その頃、用明天皇2年(587年)用明天皇が崩御した。皇位を巡って争いとなり、馬子は敏達天皇の後の詔を得て、守屋の推す穴穂部皇子を誅殺し、諸豪族、諸皇子を集め守屋討伐の大軍を起こした。この戦いに太子も一皇子として加わっている。

この戦いのなかで、太子は毘沙門天の示現を得て、信貴山の山名が生まれることになる。

そのことを書く前に、信貴山の立地について紹介する。

信貴山のある生駒山地は、主に河内国(大阪平野)と大和国(奈良盆地)を隔てる、標高300~500mほどの山が連なる丘陵性の山地で、南北に35km、東西5kmほどである。大阪側は急傾斜であるが、奈良側はゆるやかで裾野が広い。この立地から、古くよ

り奈良、大阪間の交通の要衝であり、東西方向に峠越えの道が幾筋もある。主峰の生駒山(標高642m)を中心に、南北側が低くなっている。南方にある信貴山は標高437mである。

用明2年(587年)馬子は大軍を率いて、信貴山辺りの峠道を越え、河内国渋川郡(現・東大阪市)の守屋の館へ向った。

物部氏は軍事一族であり同族を集め、稲城(稲藁を土と一緒に煉った城壁のようなものか)を築いて、頑強に抵抗した。馬子軍は3度撃退させられた。

この戦いのどの局面かは不明だが、太子の動きが記録にある。

太子はこの戦況を見て、白膠ぬるでの木を切って四天王像をつくり戦勝を祈願して、勝利すれば仏塔を建て仏法の弘通に努めると誓ったという。

もう一つは、信貴山から奈良側に下った山麓に毘沙門天が示現し、万戦必勝の秘法を太子は授かったという。太子は自ら毘沙門天像を刻み、寺を建てその像を納めた。この日時が、寅の歳寅の日寅の刻であったことから、信貴山では虎の像が尊重されている。現在、この地に信貴山奥之院がある。このことにより、太子は「信ずべき貴ぶべき山」として信貴山と名付けたという。

馬子軍は守屋軍を攻め立て、戦いの中で守屋が射殺されると、軍兵たちは逃げ散り、大豪族の物部一族は没落した。

戦いの後、馬子は泊瀬部皇子を皇位につけ崇峻天皇とした。実権は馬子にあり不満な崇峻天皇は馬子と対立した。馬子は東漢駒に命じて崇峻天皇を暗殺させ、豊食炊屋姫を皇位につけた。皇室史上初の女帝・推古天皇である。

同年、太子は守屋との戦いの際の誓願を守り、摂津国(現・大阪市)に四天王寺を建立した。

聖徳太子が信貴山に寺を創建して300余年の後、延喜年間(901年~)に中興となる命蓮上人みょうれんしやうにんが来山し

再建する。命蓮上人は東大寺で修行をし、験力が特に勝れ、醍醐天皇の重篤な病気の平癒を祈願、効験を發揮した。その際、帝の思召す願文に「朝廟安息、国土守護、子孫長久」とあるのが、朝護孫子寺の寺名のいわれである。

大治元年(1124年)には新義真言宗の祖である覚かく鏤ぼん上人(興教大師)が来山し留錫の時、生身の毘沙門天が示現し仏勅を賜り、如意宝珠を授かり、本堂の地下に納めたといわれている。よって「五段の講式」を定め不動明王、弥勒菩薩を作り、朝護孫子寺の今日の根幹をつくったといわれている。現在、朝護孫子寺は信貴山真言宗総本山である。

信貴山の山頂には松永久秀の居城、信貴山城があった。久秀の人物評はあくとして、智略、謀略で戦国時代を生きた武将である。永禄元年(1558年)に信貴山城はあったが、雑合集散を繰り返し畿内に混乱を起こしていた久秀は、織田信長に反逆して信貴山城に逃げ込んだ。天正5年(1577年)10月5日から10日にかけて、織田軍によって落成し、松永親子は最期をとげた。

この戦の中で朝護孫子寺の毘沙門天堂など堂塔ごとごとく焼失してしまった。

慶長7年(1602年)豊田秀頼の寄進によって本堂及び諸堂が再建された。しかし昭和26年(1951年)に失火により本堂を焼失、現在のものは昭和33年(1958年)に再建されたものである。

信貴山へ出発に当たって、信貴山観光協会から山上のイラストマップと若干の資料を送ってもらい、可能な情報は読み込んだ。先ず予約しておいたのが宿だった。なにしろ山上にはホテル、旅館が4軒、宿坊が3軒あるのみだった。

出発が遅れ遅れで11月5日から2泊3日の予定

となった。午前10時30分発の新幹線「のぞみ」に乗った。信貴山へは奈良県の王子駅が便利と聞いていて、新大阪駅からの乗継ぎが面倒と考えていたが、大阪駅から大和路快速という電車があり、そのまま王子駅へは25分ほどで到着した。関西圏もずいぶんと便利になっているのに驚いた。王子駅からは毎時1便の路線バスで30分ほどで到着した。

朝護孫子寺の参道が一番手前に信貴山バス停があり、立派な待合室があった。車中では「朝護孫子寺への参拝はこちらで下車です」とアナウンスしていたが10人ほどの乗客は下車しなかった。今夜のホテルは参道途中から左側に100mほど下った所にあり、教えられた終点の信貴山門まで乗車した。終点の近くには大型の駐車場があり、車時代の今では参道を最初から歩く人はほとんどなく、参道入り口辺りは閑散としていた。

終点で下車し、持参していたイラストマップを開いたが、現状とマップの差が大きく、このマップで本当に歩けるだろうかと心配になった。実際、マップでなく通行人に尋ねながら午後4時過ぎホテルに着いた。

GOTOトラベルで宿泊客が多く、宿泊施設が少ないこともあって、連泊ができず、変則的な宿泊となった。1泊目が信貴山観光ホテル、2泊目は参道入口のみよし旅館、雨天のため1泊延長したので、再び信貴山観光ホテル、それも残り一室を確保した。

2日目は、先ず参道奥右側の一段高い所にあり毘沙門天王(信貴山では全ての印刷物までこう書いて



聖徳太子像。馬上の姿は珍しく、物部との戦いをイメージしたものだろう。



参道入口にある仁王門。



参道随所に鳥居も建ち、奉納された石灯籠がびっしりと立ち並んでいる。



参道の赤門。ここを入ると朝護孫子寺と三院の境内となる。



朝護孫子寺ではシンボルともいえる寅の像。電動で頭が上下左右に動いている。



朝護孫子寺本堂への参道。毘沙門天王と染められたのぼりが立っている。



朝護孫子寺や三院の最上部に建つ多宝塔。

いるので以下同じにする)を祀る朝護孫子寺本堂に参拝し、信貴山山頂の信貴山城跡に祀られている空鉢護法堂を参拝。その後、稜線を下り松永屋敷跡、聖徳太子の前に毘沙門天王が示現したという信貴山奥之院を参拝し、尾根を横断する峠を越えて朝護孫子寺境内に戻る。標準タイム3時間のコースである。自身の体力を考え何もなければ4時間と考えていた。

連泊ができないためリュックを背負い、手作りで愛用の金鋼杖を突き、午前8時半にホテルを出た。晴天で今日の行程にはありがたかった。

ホテルで教わった道を歩き、仁王門より内側の参道途中から入った。幅5mほどの石敷の参道の両側には、奉納された灯笼がびっしりと並び、境内いたる所にもあった。長い信仰の証なのだろう。その数は寺の関係者も分からないのではと思えた。

参道を進むと右側に朝護孫子寺のシンボルでもある電動仕掛の大きな張子の虎があり、その先に朱塗りの赤門が見えた。門を入った辺りから朝護孫子寺を中心とした千手院、玉蔵院、成福院の三院など堂塔が建つ境内地となっていた。参道は急な登り勾配となり、山肌に沿って諸堂が建ち、最上部に多宝塔が境内全域を見下ろす形で建っていた。

赤門を入った辺りからマップは役に立たなくなってきた。この参道は信貴山中腹からの小さな尾根筋の上であり、左右は落ち込んでいて、途中の谷には石の橋があるなど、かなり変則な地形であった。これを平面にマップとして描いており、参道沿いにある千手院などは、参道脇の一段低いところに建てられているため、参道からは全く見えない。マップと実際は全く異なった風景だった。

ともかく上へと歩いたが、細い参道は石敷で左右は堂塔の敷地や塀で塞がれて、どこか要塞の中を歩いている感じだった。

後日、山内を歩いて分かったのだが、仁王門から多宝塔までは1kmほどで、左右の幅は500mくらいの

ところに、堂塔が密集して建てていた。

参道の突き当たりに堂があり、左右に参道が分かれていた。右か左か迷っている時、僧侶が通りかかり、やっと本堂への道が分かった。赤いのぼりが立ち並ぶ石段を上ったところに毘沙門天王を祀る本堂があった。大きな堂であるが参道を上がり切らないと見えないため迷う要因ともなっていた。

本堂は脇の44段の急な階段の上にあった。正面に廻ると、切立った断崖の上に建てられているため、奈良方面に向って大きく視界が広がっていたが、霞んで奈良の景色が見えなかったのは残念だった。

社寺を参拝する時は、より神仏に近づきたいとの思いから、いつも祈願をお願いしている。今度の祈願は10時15分からとのことで、外陣の畳の上に座って待った。堂正面の戸は大きく開いていて、堂内は明るく須弥壇の前立毘沙門天王の像が見えた。

祈願祭の導師は先の三院の貫主が交代で勤めているとのことで、後方一段下った所に3人の僧侶が着座した。祈願者はその段の左右に座った。

太鼓の音に合わせて、大声で速いテンポで般若心経が唱えられて始まった。六百巻すべてではないが、後の僧侶によって大般若転読が続けられ、1巻ごとに掛け声のような大きな声を発した。

導師によって祈願文が奏上され、再び太鼓と般若心経となった。ともかく威勢のいい祈願祭で、戦いの神である毘沙門天王を感じさせるものだった。

これから山頂へ登るにはマップでは不安があったので、祈願札を受け取る時、寺の職員に尋ねた。持っていたマップを見て、それでは分かりにくいと、線だけで道順を示した寺の地図をもらった。どうやらこのイラストマップは不評のようだった。

午前11時に本堂を出た。本堂横から多宝塔に向けて、細く急な参道を上がっていったが、この辺には堂塔が斜面に建ち並び迷路のようでもあった。

寺域の一番上にある多宝塔に着いた。これから信

貴山山頂にある空鉢護法堂へは一本道だったが、下りてきた人に山頂への道かを確認して登り始めた。マップがトラウマになっているようだった。

道はセメントで簡易舗装され、所々階段になっていて、足元はいいのだが、急斜面を一直線に登るため、細かく九十九折となっていた。多宝塔から山頂までの標高差は200m余と思えるが、これがなかなか厳しいものがあった。長い金鋼杖を支点として、何度も小休止を繰返した。森の中を抜け、空が広く明るくなってきたことで、頂上に近いことが分かった。

平日で行き違う人もいなかったが、山頂下の辺りで熟年夫婦と擦れ違ったが、汗をかきながらヨタヨタと登ってきた姿を見て、「お元気ですね」と声をかけてくれた。そう言うしかなかったのだろう。自身も歳を考えずの行動に笑うしかなかった。

空鉢護法堂の前には参道を跨ぐように小さな建物があり、右側がお守りなど並べた事務所、左に小さなベンチが用意されていた。到着するなり迷わずベンチに座り込んだ。

空鉢護法堂はすぐ横にあり、幾本かの小さな木の鳥居を入った所にあった。さほど大きくはないが木造の社殿は凜として、威厳を感じさせるものがあった。堂の前には懸崖造りの廻廊があり、そこから大阪平野が一望できるのだが、この日はやはり霞んでいた。

空鉢護法堂は天慶2年(939年)空鉢比丘くわつひくが信貴山の守護神として龍王を祀ったのが始まりという。ここでは一心に一願だけを願えば必ず叶えてくれるという護法善神でもある。

護法堂前にいると職員の方が来て、現在の護法堂の建つ場所に、信貴山城の天守閣があったと教えてくれ、堂の裏側に残る石垣も示してくれたが、450

年余も経た石垣は森と化していて、所々に残跡が見えるだけだった。天主は大阪平野、奈良盆地が一望にできる場所にあり、松永久秀はここに立って何を思っていたのだろう。

護法堂を10mほど下った所の小さな広場に「信貴山城跡」の碑石が建っていた。

広場横から高低差50mほどの未整備でずり落ちそうな急坂を下ると、信貴山山頂から南へと下る稜線に出た。稜線の中央に道があり左右に森が下がっているのがわかる。舗装されていて、ゆるく下る道は気持ちよいものがあった。

少し行くと広い平地があった。ここが信貴山城主・松永久秀の屋敷跡だった。標識がなければ見落とすほどで、手入れのいい杉が育っていた。時の流れの中で、人の存在とはかくもはかなきものか。それに比べ神仏の存在の重きこと永きことを思い、感慨にかられた。

松永屋敷跡を過ぎても尾根の下り勾配の一本道で、木々に囲まれ野鳥の声を聞き、人と行き合うこともなく、実に気分が良かった。

この道は朝護孫子寺と、尾根を隔てて奈良県側の麓に続く峠道に突当る。それを左手に下ると、先に書いた聖徳太子が毘沙門天王を自ら刻り、創建した信貴山奥之院がある。

快適に進み、マップ通りフラワーロードという大型車輛も通る山腹の幹線道路に出た。その道路を横切り、その先に奥之院の絵が描かれていた。迷うこともなかりうと、舗装された立派な道路を下っていった。かなり急な下り坂で、10分ほども下ったが何も無い。下の方に麓の集落が見てきて、マップとの差が大き過ぎると思いはじめた。その時、倉庫のような建物に老夫婦がいて、奥之院を尋ねると、「道が違う、ずいぶん下まできている」といわれ、下った

た坂の分を登ると思っただけで足が重くなった。教えられた通り、再びフラワーロードまで戻り看板を探したが何も無い。先ほど下った道路の左側に一段下って5m幅ほどの道があった。この道だろうと道を下った。道は土手に沿っていて、雑木



信貴山山頂にある空鉢護法堂への登り口。



空鉢護法堂の社。大阪平野を見下ろす形で建っている。



信貴山城跡の石碑。



松永久秀の屋敷跡。跡地には往時をしのぶものは何も残っていない。



聖徳太子の前に毘沙門天王が示現し、太子に万戦必勝の秘法を授けたといわれる地。ここに信貴山奥之院がある。

林や畑があるだけで、300 mほどのところに1軒の大きな寺が高い石垣の上にあるだけだった。聞く人もいない。先ほどの間違いが強く残っていて、脇の上手に座って休憩し、ホテルで作ってもらった塩むすびを食べた。時計を見ると1時半を過ぎていた。

これ以上の無駄は嫌だと思い、マップの端にあった観光協会に携帯で電話した。その答は「分からなかなあ50 mほど下った所にあるでしょう」だった。もう300 mほども下っているのだから、この道は違うと思ひ、最初の所まで戻った。そこで道の上に座って休んでいると、「奥之院・直進ガレージあり」と書いた小さな標示板があり、今戻った道を矢印で示していた。

矢印の示す急な下り坂の先の大きく左に曲がったところにガレージがあった。それも50 mほど先であり、先ほど通っている。見落としたかと再度、元気を出して行ってみると、ガレージの横に民家があったが、らしきものはない。民家で尋ねてみようとしたが不在。また息を切らせて最初の所に戻った。

奥之院は縁のないところなのだろうと、半ば諦めの心境になりかかっていた。煙草を喫って休んでいると、ここまで来て、道は間違っていないのなら、どこまでも下ってやろうと、意地のような気分もあり立ち上がった。

どんどん下り、先ほど引き返した所も通過すると、土手を大きく右に迂回した先に民家があった。近づくるとガレージがあり、砂利敷の庭の広い家だった。庭に入って行くと、家の前に寺院のような立派な玄関門があり、そこに信貴山奥之院とあった。

中に入ると民家と寺が相まった建物で、無人だった。狭い境内に3つの堂が横に並び、その中央に聖徳太子が自ら刻った毘沙門天王が祀られてた。

参拝を終えて、小さな木造ベンチで小休止したが、帰路を考えれば、聖徳太子に思いをめぐらせる余裕のなかったことが、少々残念だった。

坂を登りながら振り返って見ると、奥之院のある辺りは、ゆるやかに山の傾面が下がっていて、空が大きく開け、その空から毘沙門天王が示現したのかと想像するとリアリティーがあった。

ずいぶん体力を消耗してフラワーロードまで戻ってきた。坂を登りながら、先の標示板にあった「直進、ガレージあり」でなく「一本道400 m先」と標示する親切心はないのかと腹立だしかった。

ここから尾根を横断する峠道を歩いて朝護孫子寺境内に向った。2時半を少し回っていた。この道の標準タイムは約1時間だった。日没の早い晩秋の頃とはいえ充分な時間があった。

峠道に入って300 mほどの所で同じような道が二つに分かれていた。何の標識もなく、先程下ってきた道は左なのだが、右の道は見落としていたのだ。両方とも同じ雰囲気でも木々に囲まれ舗装もされていた。

今、思い出してみても、その時は何の躊躇もなく右の道を選んでいる。なぜだか分からない。

右の道を進んで300 mほどで、景色は木々に囲まれていてほぼ同じだが、沢筋を流れる水音が聞こえてきた。あれ、と思ったが奥之院のこともあり、もう少し進んでみようとして100 m余り歩くと道幅が狭くなり、下り勾配となってきた。下りはおかしいと思ひ、道を間違えたことを確信して速足で引き返した。ここでも30分ほどタイムロスとなってしまった。

分岐点まで戻って左の峠道を早足で登り始めた。ところが森の中の一本道は意外に暗く、厚い雲もできてきたようで、初めての山道に不安になってきた。しかしひたすら前進しかない。たぶんこの時は標準タイム以上の速さで歩いてたと思う。途中からは下り坂となったことも助かった。

マップにもあった大谷池があつて、道は間違っていないこと、半分ほど通過したことが分かったが、道は暗くなり歩行速度を落すことはできなかった。

やっとの思いで森の中を抜けると、朝護孫子寺の

上部で、視界が広がり明るさも戻ってきた。眼下に多宝塔が見えた時は、戻ったとどっと安堵した。

多宝塔から細い迷路のような参道を下り、赤門を通り、仁王門を出て、参道入口近くにある宿へ向った。これで予定したコースを歩くことができたが、しみじみ一緒に歩いてくれた金鋼杖がなければどうなっていただろうと、愛おしくなった。宿到着4時20分。フロントの椅子に座ると、しばらく動くことができなかった。

翌日は雨ということで1日延ばしたのだが、午前中は薄日が差した。連泊はできないので宿を出たが、予想以上の激しい筋肉痛だった。歩かざるを得ないのだから歩いて筋肉痛を治そうと、リュックを背負い、今夜の宿で、最初に泊まった信貴山観光ホテルに向った。

宿に荷物を預けて、杖だけをもって、昨日は素通りした参道を歩いた。杖に体重の半分ほどもあずけた歩行だった。

三院に廻る余欲はなく、参道沿いの開山堂、聖徳太子像、けんがいごほうどう 劔鎧護法堂を廻った。参道を歩いていると、いたるところに鳥居はあり、寺と神社が習合した空気があった。これは本尊が毘沙門天王であることにあるのだろうか。

聖徳太子像は珍しく馬に乗った姿だった。これは物部守屋との戦いをイメージしたものだろう。北村西望作であった。

この日、強く印象に残ったのが赤門の手前、参道とは逆方向に100mほど下った所にある劔鎧護法堂だった。向う途中の参道には朱塗りの鳥居が立ち並び、その突当りに堂があった。参道を進むほどに他の場所にはない空気を感じた。

堂は木造で神社のような様式の社で、高さ2mほどだった。堂前で参拝していると、狭い境内全域が強い霊気に満ちていることを感じた。一体これは、



劔鎧護法堂入口。建物の奥に社があり、社の周囲は霊気に満ちていた。

この霊気は何なのかと思ったが理解不能だった。

堂の前にお守などの授与所があり、そこにいた婦人に尋ねた。「私はここに来て日が浅いので分かりませんが、ここは霊気が強いという人が多くいます。堂の前のベンチに眼を閉じて3時間ほども座り続けた外国の方もいました」といい、堂の由来を書いたコピーをくれた。この婦人は、その口調、声、表情から、温厚な人柄がにじでていて、この婦人に会えたことが幸せに思った。

由来には、劔鎧童子が祀られている。劔鎧童子は毘沙門天王の使者で、劔の衣に身を包みキラキラ光る姿で法輪に乗って空を自在に飛び、人々の願いを叶えてくれる。醍醐天皇が重き病の時、勅命により命蓮上人が毘沙門天王に病氣平癒の祈願をした時、劔鎧童子が醍醐天皇の枕元にキラキラ光る姿で出現し、靈感を受けられると、天皇の病氣はたちまち平癒されたという。(要約)このことから現在も無病息災、病氣全快の神として信仰されているという。

午後になると空模様があやしくなり、ホテルに戻ったが、チェックイン前とあって、ホテル内の食事処で、ビール中瓶を前にしてウトウトとして夕方を待った。

翌朝は晴天。今日は帰京の日とあって気が緩んだのか、筋肉痛は昨日よりひどかった。

朝護孫子寺では参拝すべきはし、見るべきは見た気はしたが、このまま帰るのも毘沙門天王に失礼と思い、リュックを背負い、ゆっくりと本堂に行き、3日間の山内の無事を感謝し、帰路の平安を願って手を合せ深々と一礼した。

本堂裏に霊宝館があり、ここで朝護孫子所蔵の国宝・信貴山縁起絵巻の絵葉書を買った。この時、売店の品の良い老婦人から「信貴山ではどこが良かったですか」と聞かれ、「劔鎧護法堂で霊気を強く感じました」と答えると、その方も劔鎧護法堂に強い霊気のあることは知っていて、よく参拝するといい、「そこで霊気を感じたのなら劔鎧童子が守ってくれるから病気にはなりません」と、ありがたい言葉をいただいた。

参道を下り、仁王門を出て、昨日の宿の前を通り、参道入口下にある信貴山バス停へ向った。

後はバスで下り、大和路快速、新幹線と座り続ければ東京に着く。3泊4日の思いの深い信貴山・朝護孫子寺参拝行が終ろうとしていた。